

大正期雑誌の書き手・読み手の位相差と 外来語の使用実態

石井 久美子

1 はじめに

近代の日本語を把握する上で外来語は重要な位置を占めている。明治期や戦後期は政治的社会的影響から大きな変化があり注目度が高い。その間に位置する大正期は外来語が急増した時期といわれるが、その実態はいまだ明らかになっていない部分が多い。

数が少ないが、先行研究では、以下のようなことが指摘されている。

岡本(2004)は外来語受容史において、大正期はそれまでの音訳や翻訳から読み書きの容易な片仮名表記に変わったと書いている。明治期までとの差は次の2つの文献でも指摘されている。石綿(2001)は当時の外来語を扱う辞典や文学作品から用例を挙げ、大正戦前昭和期の外来語の発展と成長の基礎は教育の普及による外国語の知識にあると述べる。榎垣(1963)は、大正期には外来語が気取った語から普通の日常語となったと述べ、ヴァやファという表記の普及、ひらがなと長音母音表記の流行を指摘する。米川(1984)は幕末から昭和初期の外来語の定着過程を社会文化的背景から用例を挙げて論じている。発展期、最盛期にあたる大正期には、教育の普及により大衆雑誌が多く読者を得たこと、外来語辞典や新語辞典が出版され外来語の研究が始

まったこと、関東大震災によりヨーロッパ文明からアメリカ文明に一挙に方向転換したことが指摘されている。

大規模調査として、飛田(2003)は明治から昭和の文学作品1000点のデータベースを作成し、特定の語の変遷を追った論考を載せている。橋本(2010)では1911～2005年の朝日新聞の社説を資料に外来語の増加過程を明らかにしており、普通名詞の高頻度語彙、広範囲語彙の分析を行っている。国立国語研究所(1987)は『中央公論』の1906～1976年までの10年ごと計8年分を対象とし、外来語が一貫して増え続けていること、原語は英語の比重が年々高まっていること、表記は同語における仮名表記と漢字表記が1926年に逆転すると指摘する。

外国地名に関して、山本(2009)は、1875～1925年の新聞4紙を資料とし、後半期には外国地名の漢字表記が増大しゆれも安定するが、1920年代に一気に減少すると述べる。深澤(2003)は、1825～1928年の『太陽』を資料とし、口語文体の表記の受け入れ易さを漢字表記から片仮名表記への移行の要因とする。

大正期の外来語辞典、新語辞典を調査した鄧(2013)は、前期には社会思想用語、中期には経済関係語、後期には視聴覚文化に関する語が見られると述べる。

以上のように、大正期は外来語の急増、

漢字表記からカタカナ表記への移行が指摘されている。しかし、大正期の抽出年が2～3年にとどまるものや、普通名詞のみ、外国地名のみ、辞典のみのように限定的であり未開拓部分が多い。

石井(2012)では、大正期の『婦人公論』6号分を用いて、外来語の一般名詞と固有名詞を対象に表記の観点から分析を行った。表記は8種に分類され、漢字表記から仮名表記へ、そしてルビのある表記からルビのない表記へと変化していることを指摘した。また、漢字表記と仮名表記の割合の逆転が先行研究よりも前に起きていることを明らかにした。

本稿では、『中央公論』と『婦人公論』計24号分を資料に、大正期の外来語を語彙と文体、そして書き手・読み手の位相差から明らかにする。

2 資料

本稿で資料とする『中央公論』『婦人公論』は、どちらも中央公論社(現 中央公論新社)から発行された雑誌である。

以下、それぞれの概要¹⁾、読者と筆者、本稿の調査範囲について述べる。

2-1『中央公論』『婦人公論』の概要

『中央公論』は、明治20年に創刊した『反省会雑誌』を前身としており、明治32年に『中央公論』と改題している。大正期には知識人必読の総合雑誌としての原型が確立していた。発行部数は拡大の一途を遂げ、大正初めには『太陽』を凌駕し、『改造』の創刊(大正8年)後は『改造』との双壁時代であった。大正期の『中央公論』は「デモクラシー言論の主舞台としての座」を占めていたといえる。労働問

題、社会主義などがよく取り上げられ、国際的な視野で論じられている。専門家の立場から最新の研究や論を取り上げ紹介した記事も見られる。

『婦人公論』は、『中央公論』で特集された夏期増刊「婦人問題号」(大正2年7月)を契機に、大正5年に『中央公論』の姉妹誌として創刊された。創刊時の『婦人公論』は公論欄を巻頭に知識婦人を対象とし高踏的装いで出発している。そして、同時期に創刊された『主婦の友』や『婦人倶楽部』とともに有力三誌として発行部数を伸ばしていった。テーマには、結婚、職業、家庭と婦人の問題などがとりあげられ、日本の婦人運動の策源地として、婦人に関するあらゆる問題が議論される場となっていた。時局に合わせ、国際、政治問題にも女性解放の観点から取り組んでいることも特徴的である。

発行部数は、『中央公論』が明治44年に翌春には2万部を突破する勢いだという予告広告を出しており、『婦人公論』は半澤(1986)を参照すると、大正8年に3.5万部、大正10年に4.5万部、大正12年には2.5万部とある。

2-2読者と筆者

『中央公論』の主な読者は知識人エリートである男性で、読みを助けるようなルビ表記はほとんど使われていない。筆者は、男性33人、不明(無記名)3人で、女性はいない。職業は学者、外交官、政治家、評論家などである。

それに対し、『婦人公論』の主な読者は中流家庭の高学歴女性で、総ルビを採用している。筆者は男性81人、女性61人、夫妻3組、不明6人である。職業は『中央

公論』と共通するが、他に女性運動家、作家、詩人、新聞記者、男性筆者の夫人などが見られる。

2-3 調査範囲と方法

『婦人公論』の創刊年（大正5年）に合わせ、『中央公論』と『婦人公論』の大正5～16²⁾年の各1月号（計24号分）の「公論」に登場する外来語³⁾を対象とした。分量の少ない年と記事の切れ目を考慮し、各年65ページ前後を分析範囲とした。対象とした記事は、『中央公論』55、『婦人公論』180の計235である。

3 『中央公論』と『婦人公論』の外来語の出現状況

3-1 延べ語数と異なり語数⁴⁾

『中央公論』の外来語の延べ語数は4363、異なり語数は1221、『婦人公論』の外来語の延べ語数は2585、異なり語数は950であった。総ページ数は『中央公論』が796ページ、『婦人公論』763ページとほとんど変わらないが、延べ語数も異なり語数も『中央公論』が『婦人公論』を上回っていることがわかる。

3-2 固有名詞と一般名詞

ここからは、「獨逸」のような国名や「マルクス」のような人名などの固有名詞と、「モーダンガール」のような一般名詞に分けて考察する。

まず表1の全体の欄に注目する。固有名詞と一般名詞に分けた場合も、延べ語数と異なり語数の両方で『中央公論』の方が『婦人公論』より多くなっていることがわかる。固有名詞と一般名詞を比べると、『中央公論』も『婦人公論』も固有名

表1 『中央公論』と『婦人公論』の延べ語数と異なり語数

	『中央公論』				『婦人公論』			
	延べ語数		異なり語数		延べ語数		異なり語数	
	固有 名詞	一般名詞	固有 名詞	一般名詞	固有 名詞	一般名詞	固有 名詞	一般名詞
全体	3325	1021	781	428	1769	777	545	374
大正5年	76	28(0.58)	42	21	90	41(0.85)	43	32
大正6年	457	131(2.38)	169	48	122	5(0.09)	72	4
大正7年	144	21(0.35)	64	21	10	43(0.72)	8	22
大正8年	371	78(1.32)	80	40	133	39(0.66)	62	27
大正9年	141	194(3.29)	69	42	348	29(0.49)	86	18
大正10年	286	72(1.00)	79	48	629	85(1.18)	156	31
大正11年	113	75(1.04)	72	56	117	85(1.18)	69	53
大正12年	519	60(0.85)	154	36	85	85(1.20)	47	54
大正13年	473	89(1.22)	104	51	73	52(0.71)	40	34
大正14年	175	45(0.67)	53	33	54	94(1.40)	28	55
大正15年	415	117(1.92)	119	41	44	90(1.48)	39	71
大正16年	155	111(1.68)	75	48	64	129(1.95)	50	42

詞が一般名詞より多くなっている。

1語あたりの出現回数（延べ語数÷異なり語数）を調べると、『中央公論』の固有名詞は4.26回（3325÷781）、一般名詞は2.39回（1021÷428）、『婦人公論』の固有名詞は3.25回（1769÷545）、一般名詞が2.08回（777÷374）となる。固有名詞も一般名詞も、『中央公論』が『婦人公論』を上回っており、『中央公論』では繰り返し使われる語が多いことがわかる。特に、固有名詞は『中央公論』では4.26回、『婦人公論』では3.25回と1.01回分の差があり、『中央公論』の固有名詞は繰り返し使われる傾向が顕著といえる。『婦人公論』が女性を取り巻く環境を中心に海外を取り上げるのに対し、『中央公論』は海外の情勢を論じることが中心に置かれ、その公論のテーマで扱われる固有名詞が繰り返されるためである。

次に、年別に見てみる。表1からわかるように、『中央公論』では延べ語数も異なり語数も固有名詞が一般名詞を上回っている。『婦人公論』でも同様の傾向だが、そうではない年もある。大正16年で一般名詞の方が固有名詞より延べ語数が多いのは、「モーダンガール」を65回用いているのが原因である。大正7、14、15年では延べ語数だけでなく異なり語数も

一般名詞が固有名詞を上回っている。これは、『婦人公論』の外来語における一般名詞の比重が大きいことを意味する。固有名詞と一般名詞の延べ語数が同数の大正12年も同じように説明できる。

表1の一般名詞の延べ語数の括弧内は1ページあたりの出現語数である。『中央公論』で各年の増減が激しいのは「デモクラシー」のようなキーワードの多用が原因で、『中央公論』の外来語使用が公論のテーマに左右されやすいことがわかる。『婦人公論』は徐々に1ページあたりの出現語数が増えており、生活環境に見られる「ラヂオ」「ポケット」など生産物および道具を表す語の増加が原因である。固有名詞では顕著な傾向が見られないことから、外来語の増加の原因が一般名詞にあり、中でも『婦人公論』は積極的に一般名詞を取り入れているといえる。

4 出現回数の多い語

次に、出現回数の多い語に注目する。4-1では『中央公論』『婦人公論』の上位20位の語をとりあげる。4-2では一般名詞に限定し、『中央公論』『婦人公論』の上位10位の語をとりあげ、両雑誌間の違いを述べる。

4-1 出現回数上位語

まず、各雑誌の出現回数の多い外来語について言及する。上位20位の語は、『中央公論』は表2、『婦人公論』は表3のような結果となった。なお、表2と表3に示した語表記は最多例を代表として載せている。

以下、(1)外国地名(2)外国人名(3)一般名詞の順に分析していく。

(1) 外国地名

表2『中央公論』の上位語

	上位語(全体)	出現回数
1	獨逸	419
2	亞米利加	236
3	露西亞	205
4	歐羅巴	184
5	デモクラシー	133
6	佛蘭西	77
7	アリアン	73
8	ブラジル	72
9	英吉利	61
10	マルクス	47
10	レニン	47
12	印度	44
13	ベルンシュユタイン	43
14	伊太利	42
15	セミチック	41
16	パーセント	38
17	亞細亞	37
18	土耳其	35
19	希臘	33
20	波斯	29

表3『婦人公論』の上位語

	上位語(全体)	出現回数
1	アイルランド	75
2	イギリス	73
3	モータンガール	68
4	獨逸	61
5	ロシア	57
6	アウガスチン	51
7	フランス	36
7	ポーランド	36
9	エレン・ケイ	35
10	ヨーロッパ	33
11	トルストイ	32
12	基督	31
13	ストリンドベルグ	29
14	ブルジョア	26
15	バラック	24
16	アメリカ	19
16	印度	19
18	トスカ	18
18	ロスマル	18
20	イブセン	17
20	モニカ	17

表2と表3の地名を比較すると、網掛けで示したものは両雑誌に共通するもので、上位の地名は雑誌を問わず登場していることがわかる。表記は異なっており、『中央公論』は漢字表記、『婦人公論』はカタカナ表記を主としている。

獨逸は『中央公論』の1位、『婦人公論』の4位である。ドイツはマルクス主義、サンディカリスムなど当時の政治、社会に大きな影響力を持っていた国であり、知識人である筆者と読者双方が関心を持っていたことの現れである。『中央公論』2位の亞米利加は関東大震災を契機にヨーロッパ文明からアメリカ文明へ変わる時期である(米川(1984))ことを反映した結果だといえる。『婦人公論』1位のアイルランドは独立運動の盛んな地域の例として挙げられている。2位のイギリスは婦人運動の先駆となった国であり、広範囲に出現している。

(2) 外国人名

表2と表3で人名に注目する。上位の人名は複数の記事に見られる語と特定の記事に集中して見られる語に分けられる。『中央公論』の上位語には、10位のマ

ルクスとレニン(レーニン)、13位のベルンシュタインと、社会主義者が登場している。ベルンシュタインは『中央公論』の1つの記事に集中して出てくる。一方マルクスとレニンは広範囲に見られ、『婦人公論』でもそれぞれ10例、14例と数は少ないが使用されていることから、大正期の公論には欠かせない人物名であったといえる。マルクスに関しては『中央公論』の本文には「マルクシズム」「マルクシスト／マルキシスト」などの派生語が登場しており、一般名詞にもなっている。

『婦人公論』の上位語には7名もの人名が挙がっており、文化や女性運動に関連した人物である。大正期全般の7～10種の記事という広範囲に見られたのは、11位のトルストイ、20位のイブセン、9位のエレン・ケイである。トルストイは『アンナカレーニナ』『我懺悔』の著者、イブセンは著名な近代文学者として登場し、エレン・ケイはその恋愛と結婚の思想が取り上げられている。上位の人名が男性筆者による使用例ばかりである中で、エレン・ケイは婦人運動家による使用が見られるのが特徴的である。

他方、特定の記事に集中したのは、13位のストリンダベルグ、6位のアウガスチンと20位のモニカ、18位のロスメルである。作家「ストリンダベルグ」は劇作家や英文学者といった文化人に取り上げられている。神学者アウガスチンとその母モニカは「聖アウガスチンの懺悔録」(大正9)に、近代劇『ロスメルホルム』の男性主人公ロスメルは「近代文学に現れた懺悔告白」(大正9)に見られる。

地名で出現回数の上位に入っている語は両雑誌に共通するものが多いのに対

し、人名は扱われているテーマによって大きな違いが出ている。これは、地名が当時の社会情勢を反映しており、政治や社会問題を語るにも、それを背景とする家庭生活を語るにも欠かせない語であるのに対し、人名は、マルクスやレニンのように公論に欠かせない人物は限られているということを意味する。

(3) 一般名詞

表2と表3の一般名詞に注目する。『中央公論』は5位にデモクラシー、16位にパーセント、『婦人公論』は3位にモダンガール、14位にブルジョア、15位にバラックが登場している。『婦人公論』の方が上位に一般名詞が多く見られることが特徴的である。『中央公論』と『婦人公論』の上位語の9割は固有名詞が占めており、上位に見られる一般名詞はそれだけ定着度が高かったと考えられる。表記もカタカナ表記であり、公論の読み手や書き手にとっては訳語を漢字で添えたり、アルファベットで原語を示したりする必要のない語であったことを意味する。

4-2 一般名詞の上位語

外来語の一般名詞の出現回数上位10位の語を示すと、『中央公論』が表4、『婦人公論』が表5ようになる。

(1) 『中央公論』と『婦人公論』に共通する一般名詞

表4と表5に共通しているのは、「ブルジョア」と「プロレタリア」という対になる語である。

「ブルジョア」は『中央公論』で27回、『婦人公論』で26回とほぼ同じ回数登場しているが、その使用には差異が見られる。以下に実際の用例を2つ挙げる。

表4『中央公論』の一般名詞上位語

	上位語	出現回数
1	デモクラシー	133
2	パーセント	38
3	ブルジョア	27
4	プロレタリア	24
5	サンデカリズム	21
6	ギルド	18
7	プロパガンダ	18
8	マルクシズム	16
9	ホルモン	13
10	瓦斯	11

表5『婦人公論』の一般名詞上位語

	上位語	出現回数
1	モーダンガール	68
2	ブルジョア	26
3	バラック	24
4	パン	16
4	リズム	16
4	ピアノ	16
7	デカダン	10
8	ホテル	9
9	サブラゼット	8
9	プロレタリア	8

〈例1〉今は過去のものとなつてゐる政治研究會の開拓者の貢獻は、忘れられてはならぬものの一つである——が着々と成果を挙げ始めた頃は、**ブルジョア**議會の絶望的頹廢状態が、既に充分に一般世人の共通の話題となり、(大山郁夫「轉換期に於ける政界の新状勢」『中央公論』大正16年1月号)

〈例2〉そこで婦人の或る群、特に**ブルジョア**婦人の一群はひたすらに花の匂をしたふ胡蝶のやうに多彩な生活をやゝともすれば憧憬しやうとする。(新居格「婦人解放の新意識」『婦人公論』大正11年1月号)

「ブルジョア」に接続する語に注目するとその違いがよくわかる。『中央公論』では「ブルジョア議會」「ブルジョア政治」「ブルジョア諸國家」といった形で登場する。一方、『婦人公論』では「ブルジョア婦人」「ブルジョア生活」「ブルジョア階級」といった形で登場する。『中央公論』では「政治や制度」の話題で批判対象として用いられているのに対し、資本家階級に属する「人々」を指す語として用いられている。

「プロレタリア」は『中央公論』で24回、『婦人公論』で8回用いられており、『中央公論』でも『婦人公論』でも無産階級に属する「人々」のことについて使われている。そして『婦人公論』の「プロレタリア」

ではそれに加えて、文学や芸術の文脈でも使用されている。

〈例3〉『月夜の喫煙』の作者新居格氏に附

いて知らんと欲したのも其他の**プロ**

レタリア作家及び女流作家に知らん

と求めるのもたゞにそのプロレタリア

宣傳のみではない。(生田花世「現代女

流作家心境論」『婦人公論』大正16年1

月号)

(2)『中央公論』の一般名詞上位語

表4の『中央公論』の一般名詞上位語を見ると、「デモクラシー」「プロパガンダ」「マルクシズム」や、分派である「サンデカリズム」(急進的労働組合主義)や「ギルド」など社会主義に関する語が登場している。

1位の「デモクラシー」は、当時の政治状況の問題点を語る中で133回登場している。7つの記事で用いられているが、「デモクラシーの制度を論ず」(大正9)という記事で93回と繰り返し用いられていることが上位語となった大きな要因である。『婦人公論』での「デモクラシー」の出現回数は5回のみで、社会、生活、家庭の基調であり尊重すべきものとして用いられているのとは対照的である。

5位、6位の「サンデカリズム」「ギルド(社会主義)」「プロパガンダ」は『中央公論』では、正面から問題点を論じるキーワードとして繰り返し用いられている。それに対し『婦人公論』では、大正10年に「人類の苦悶号」と題した号で特集された記事の中でわずか4回、2回、7回と、雑誌刊行時の社会を説明する語として用いられているにとどまる。8位の「マルクシズム」については『婦人公論』での出現回数は0回である。

2位の「パーセント」は数字の後に接続

する単位として使用されている。「世界の失業苦」(大正16)で失業率などを表すために30回と多用されている。

9位の「ホルモン」は理学博士丘淺次郎の「人間生活の矛盾」(大正15)という記事で、自然淘汰とホルモンの関係について述べられた箇所¹¹回用いられている。また「瓦斯」は「國政並に市政に對して私の持つ不服の廉^レ」(大正12)という記事で「瓦斯會社」「瓦斯料金」といった形で多用されている。

以上のように、社会主義に関連する語が当時の社会の問題点を論じる中で多用され、理学博士による「ホルモン」の使用や、労働問題を論じる上で必要な単位の「パーセント」の使用など、上位語は『中央公論』の扱う話題を反映した結果となっている。

(3)『婦人公論』の一般名詞上位語

表5の『婦人公論』の一般名詞上位語を見ると、「モーダンガール」は一般名詞の中で出現回数が68回と最も多く、「モダン、ガール雜觀」(大正16)という特集内の記事で繰り返し使われていることが原因である。『中央公論』での出現回数は0回である。当時、新奇な存在として注目を浴び、批判もされた「モーダンガール」だが、その語は女性筆者だけが用いており、女性の権利拡張を主張する『婦人公論』の読者の関心も高く、『婦人公論』では上位語となったと考えられる。

また、女性運動家が多数執筆している『婦人公論』ならではの「サフラゼット」(英国の婦人参政権運動の急進派)といった語が見られる。「自由と民主主義の榮ゆる世界へ」(大正10)という記事で「シルビア・パンカアスト嬢」を説明する語

として使われている。

3位の「バラック」は関東大震災後に登場し、2種の使い方が見られる。そのうち1種類は、勝屋英造編(1915)『外来語辞典』の「バラック(Barrack)[英](一)兵營。兵舎。(二)勞働者などの屯所。假屋。」でいうところの、(二)の意味で用いられた「バラック生活者」などの例である。もう1種類はそれを派生させた意味での使い方である。「上下思想とルパシカ思想」(大正14)で用いられているのだが、「破^{くわい}壊^{くわい}された東京が忽ち再建された如^{ごと}くに多^{おほ}くの思想^しや藝術^{さう}の團體^{げいじゆつ}が大戦以後俄に雨後の草^{だんたい}のやうに族出^{たいせん}したが」と中身の^いない思想^ごを非難^{きのこ}する意味で「バラック思想^{ぞくしゆつ}」と使っている。

7位の「デカダン」は「デカダン文學」「デカダン派」という文化的な文脈で用いられている。

そして、4位と8位には、「パン」「リズム」「ピアノ」「ホテル」という具体的な語が挙がっている。『中央公論』での使用はいずれも0~1回にとどまっていることを考えると、『婦人公論』に特徴的な傾向だといえる。用いているのは女性筆者に限らず、「リズム」「ホテル」は男性筆者のみが使用している。これらの語は、『婦人公論』の想定読者である女性の関心に沿った語であるといえる。「リズム」は「家庭の舞踊化音楽化」(大正12)で15回登場する。「ピアノ」は「今の若い女の身のたしなみ」(大正7)という特集で、娘にさせている／させたい習い事として10人の筆者が挙げている。「パン」は文化生活、西洋食の文脈などで、記事を限定せずに使用されている。「ホテル」は「帝國ホテル」などの形で登場するが、「上下

思想とルパンカ思想」(大正14)では粗末な家屋を称する皮肉めいた語としても用いられている。

以上のように、時代を象徴する「モーダンガール」から、婦人運動と関係する「サフラゼット」といった語、そして「ピアノ」や「パン」など具体的な語まで、『婦人公論』のテーマを反映した幅広い語が上位に並んでいることがわかる。

5 文体と位相差からみた外来語

『中央公論』と『婦人公論』の文体を見ると、文語体で書かれた記事、口語体で書かれた記事の他に、1つの記事の中に文語体と口語体が混ざった文語体口語体混交体(以下混交体と呼ぶ)がある。例えば『中央公論』では、同じ記事の中で文末が「である」でありながら「踏まずして」「至らしめた」といった文語調の語が2～3行に1語という高頻度で登場する記事が最も多い。これを仮に文語調寄りと呼んでおく。それに対し、『婦人公論』は、口語体の記事が最も多く、続いて、同じ記事の中に口語体を基調としつつも文語調の語が混ざるような文(以下口語調寄りと呼ぶ)が多くなっている。全体を通してみると、文体は『中央公論』の記事が文語調寄りであり、『婦人公論』の記事が口語調寄りであるといえる。

「4.出現回数の多い語」で見た上位10位の一般名詞の外来語が出てくる記事の文体を調査すると、『中央公論』も『婦人公論』も混交体が中心であり、口語体と口語調寄りの文体で外来語が多く使用されている。文語体では外来語の使用が特徴的であり、上位語を例にえば、『中央公論』の文語体の記事には見られず、『婦

人公論』の文語体の記事では「パン」「ピアノ」のみが見られる。

次に、筆者を中心に文体と雑誌と外来語の関係を考える。男性筆者と女性筆者が外来語を使用した記事の文体を調査すると、男性筆者は文語調寄りの文体、女性筆者は口語体が最も多くなっている。

同じ筆者でも雑誌による書き分けが見られる。『中央公論』と『婦人公論』の両方に記事を執筆している筆者が9人⁵⁾いる。該当する記事は筆者1人につき各雑誌1～3件である。9人の筆者が両雑誌に書いた記事を比べると、文体に書き分けが見られる。三宅雪嶺は文語体と口語体の混ざった混交体を用いているが、『中央公論』の記事では文語調寄りであり、『婦人公論』の記事では口語調寄りである。杉森孝次郎は『中央公論』の記事では文語調寄りの文体を用いているが、『婦人公論』では口語体の文章も書いている。

記事によって長さが違うため単純な比較はできないが、文体差は外来語の固有名詞と一般名詞の割合にも影響すると考えられる。米田實が『中央公論』と『婦人公論』に文語調寄りの文体で書いた記事はいずれも固有名詞が9割を超え圧倒的に多い。それに比べ室伏高信が『中央公論』と『婦人公論』に口語体で書いた記事は一般名詞の割合が多くなっている。

文体差は外来語表記にも影響しており、「露西亞／ロシヤ」「倫敦／^{ロンドン}ロンドン」のように、『中央公論』の記事では漢字、『婦人公論』の記事ではカタカナとなっているものがある。『中央公論』は『婦人公論』に比べ文語調寄りの文体の記事が多いため、全体的に文章が硬く、扱っている内容も政治や国際問題などが多い。

漢字は仮名に対して高いものとして置かれるため、文章の格を上げることにつながっていると考えられる。三宅雪嶺の書いた記事で、『中央公論』では「獨逸」、『婦人公論』では「獨逸^{どいつ}」とひらがなルビを付けている例がある。これもカタカナルビよりもひらがなルビの方が軟らかい文章には馴染むためだと考えられる。

『婦人公論』は男女両方の筆者がいるため、書き手の性別に注目すると、男性筆者の外来語は延べ語数が2236、異なり語数が809、女性筆者の外来語は延べ語数が336、異なり語数が167である。文章量に違いはあるが、一人あたりの使用数は男性筆者が27.6、女性筆者が5.5と圧倒的に男性筆者の使用が多い。

品詞については、名詞以外にも、数は少ないが動詞、形容動詞、形容詞、助動詞がある。『中央公論』は形容動詞6例（「アカデミックな」）、形容詞1例（「大きい^{じょうき}」）、動詞2例（「ペープする」「refineする」）にとどまった。それに対し『婦人公論』は形容動詞（男12例、女10例）、動詞（男8例、女5例）と用例が多く、男女でその数が拮抗している。女性筆者には「シリアスなる」「ヒステリックに」「デPENDして」など男性筆者と同程度の外来語の使用が見られ、一人あたりの使用数の違いを興味すると積極的な使用といえる。

以上のように、口語調の語が優位に出てくる文体で外来語が多く見られ、男性筆者は文語調寄りの文体で外来語が多く、女性筆者は口語体で外来語が多くなることがわかった。

6 まとめ

大正期の外来語は、地名のような頻出

語と、テーマに沿った抽象的な語と、生活に密着した具体語というように重層化していることが明らかになった。

そして、書き手と受け手の性差への注目により次のようなことがわかった。

外来語の数は男性筆者が圧倒的に多い。書き手も想定読者も男性である『中央公論』は漢字が、書き手の一部と想定読者が女性である『婦人公論』ではカタカナが用いられている。一般名詞では、『中央公論』では社会情勢を表す思想や、最新の研究の中に登場する専門用語、情報の細かさを表す単位が多く見られたのに対し、想定読者が女性である『婦人公論』では流行の事物や生活に密着した語が多く、女性筆者による、名詞以外の品詞の積極的な使用が認められた。現代でも想定読者を女性とする雑誌が積極的に外来語を使用しているが、大正期においても想定読者である女性は、「新しい」外来語への関心が高く、ものにするのも早かったといえることができる。

語種と文体の関係は、漢語は男性性、和語は女性性と結びつくといわれている。本稿の調査によって、外来語は、文語体、固有名詞や抽象名詞、精密さを示す単位、繰り返しの使用という点で男性性と結びついており、口語体、一般名詞や具体的な語、流行語、品詞を問わない幅広い使用という点で女性性と結びついていているという結果が得られた。

注

- 1) 以下、『中央公論』と『婦人公論』の概要は『日本近代文学大事典』を中心に木村(2011)や永嶺(1997)を参照してまとめた。

- 2) 大正15年12月25日に元号が昭和に改まったため、大正16年1月1日発行となっており、その表記を尊重した。
- 3) 「公論」部分は時代を捉えた記事が載り、小説のように技巧的な用例が少ないと考え、調査対象に選んだ。外来語は、カタカナのみ、漢字のみ、アルファベットのみ、ルビ付き、アルファベットとの併記といった全ての表記を対象とした。ただし、「台湾」「上海」など原語が漢字表記のものや、「英国」「英」などの略称は本稿では対象外とした。
- 4) 異なり語数は、「モダンガール」「モダンガール」「モダン・ガール」「モダンガール」「モダンガール「現今の娘」といった表記のゆれは考慮せず、1種類として数えた。
- 5) 『中央公論』と『婦人公論』の両方に執筆しているのは、姉崎正治、丘淺次郎、河田嗣郎、杉森孝次郎、三宅雪嶺、室伏高信、森本厚吉、柳澤健、米田實の9人である。

参考文献

- 石井久美子(2012)「大正期の『婦人公論』における外来語表記の変遷」『人間文化創成科学論叢』第15巻
- 石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 榎垣実(1963)『日本外来語の研究』研究社
- 岡本佐智子(2004)「外来語の受容と管理：言語政策の視点から」『北海道文教大学論集』5
- 勝屋英造編(1915)『外来語辞典』二松堂書店
- 木村涼子(2011)『〈主婦〉の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館

国立国語研究所(1987)『雑誌用語の変遷』秀英出版

鄧牧(2013)「大正期における外来語の増加に関する計量的分析」『国立国語研究所論集』6

永嶺重敏(1997)『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール

日本近代文学館・小田切進編(1978)『日本近代文学大事典』第五巻、講談社

橋本和佳(2010)『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ研究叢書<言語編>第86巻、ひつじ書房

半澤成二(1986)『大正の雑誌記者』中央公論社

飛田良文(2003)『明治・大正・昭和の外来語史研究』平成11年度～平成14年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書

深澤愛(2003)「漢字平仮名交じり文中における表記の選択—博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記—」『日本語科学』第14号

山本彩加(2009)「近代日本語における外国地名の漢字表記—明治・大正期の新聞を資料として—」『千葉大学日本文化論叢』第10号

米川明彦(1984)「近代における外来語の定着過程」『京都府立生活文化センター』第9号

付記

本稿は、第124回表現学会東京例会(平成25年1月12日)にて発表したものを改題・改稿したものです。ご助言いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

(お茶の水女子大学大学院生)